



「こころらぼ」  
こころのトレーニング

スクールサポーター  
(臨床心理士・公認心理師)  
小林 真理

視覚的な伝え方

私が関わっているケースの中には、子どもが幼稚園や保育園に入る前から関わっているケースがあります。中学生だとしたら、約10年のお付き合いということになります。子どもや保護者と隔週でお会いすることもあれば、何もない時には数年間お会いしないこともあります。

先日、2年ほど会っていないかった中学生の保護者の方と面談がありました。「友達とケンカをしてしまい、学校に行きたがらない」とのことでした。よくよく聞いていくと本人の思い込みの強さから誤った情報を強い言葉で友達に言ってしまう、言い返されたことに対して、納得ができずに、さらに感情的になってしまった、とのことでした。

保護者の方は、担任からの客観的な情報と本人からの断片的な言い分、本人の「思い込みの強さ」という特性から

総合的に判断して「うちの子が種を撒いたと思うけど、本人にどう伝えて行くのがいいのか」と話されました。

中学生となると、自分と他人との比較、自立心と依存心の葛藤、気分のいい時と悪い時の差の大きさなど、いわゆる思春期の時期です。誰でもあってもこの時期は難しいものですが、特性がある場合には、さらに生きづらさが増してしまうこともあります。さらに、私たち大人は自分達もその時期を経ているはずなのに、その時のことをすっかり忘れてしまい、大人目線になりがちです。お互いに通じにくい状況がある上に、特性があるとなると「伝えにくさ」は格段にあがります。

この中学生のお子さんの場合は、ケンカの後はどうしたらいいかわからずにいること、自分の非が認められずに相手が許せずにいること、などが登校渋りの背景にありそうです。

私は保護者の方と「言葉だけではなく、出来事を「自分」「相手」という時系列のやりとりして描きだしながら伝えることを提案しました。出来事に対して、自分や相手がその時どんな思いでいたのか、何故この言動になったのか、など、視覚的に追っていくこ

とで、事実を客観的にみることでできるからです。そうすることで、自分の言いかも正しく表現することができ、相手の思いも落ち着いて察しやすくなります。「この時、こういう思いだったんだね」「それで、この言葉になっちゃったんだ」「こうすればよかったのかもね」など、聞く側へ伝える側にとっても、描いて視覚的にしていくことで、伝えやすくなります。

自分の「非」を認めることは、小さい子どもでも、中学生であっても難しいことです（時には大人でも難しいこと...）。言葉の使い方や絵を入れるなど、様々な工夫は必要になるかもしれません。幅広い年齢において、「視覚的な伝え方」は有効な手段です。全てのことでの手段をつかう必要はありませんが、本当に伝えたいこと、わかってもらわなければならぬことは、こういう方法もあることを知っているといいかもしれませんね。

過去の「こころらぼ」は、町ホームページからご覧いただけます。



## 野球しようぜ!

メジャーリーガーの大谷翔平選手より寄贈された野球用グローブが届き、1月9日(火)の町立3小学校の始業式で児童にお披露目しました。

また、町スポーツ協会より野球用ボールもあわせて寄贈されました。



### 児童手当を指定口座に振り込みます

令和5年10月分から令和6年1月分の児童手当を2月9日(金)に振り込みます。受給者の方は入金を確認してください。



【問い合わせ先】  
こども教育課

児童係

☎45・8672

